

称号及び氏名	博士(言語文化学) 金 美林
学位授与の日付	平成21年3月31日
論文名	日本語の主題の省略と顕現 —継起関係にある同一主題の文接続の考察から—
論文審査委員	主査 野田 尚史 副査 張 麟声 副査 田浦 秀幸

論文要旨

本研究は、文接続における日本語の同一主題の省略と顕現の解明を目的としたものである。

文接続における同一主題の省略と顕現の現象についての先行研究では、「時間的、空間的ギャップがない事象と事象の接続では、主題は省略される場合が多い」(砂川(1990))、「事象叙述文と事象叙述文の連鎖では基本的に主題は省略される」(清水(1995))としているが、このような研究からでは、以下のような主題が省略される文接続と、主題が顕現する文接続についての説明が難しい(例文中の、□は接続詞を、 は主題を、 ϕ は接続詞、或いは主題が省略されることをそれぞれ指す)。

- (1) 田中は店へ行った。 ϕ ϕ 便せんと封筒を買った。
- (2) 田中は店へ行った。 そして ϕ 便せんと封筒を買った。
- (3) 田中は店へ行った。 ϕ 彼は便せんと封筒を買った。
- (4) 田中は店へ行った。 そして 彼は便せんと封筒を買った。

本研究は、継起関係の同一主題の文接続である以上の4つの文接続の成立条件を、結束性の視点から考察し、同一主題の省略を可能にする要素と同一主題の顕現を必要とする要素、及び4つの文接続のそれぞれの用法について論じた。序章では、本研究の目的、概要、構成を述べた。第1部では本研究の理論的枠組みを述べ、第2部では、主題の省略を可能にする要素、及び主題が省略される(1)(2)のような文接続の用法について、第3部では、主題の顕現を必要とする要素、及び主題が顕現する(3)(4)のような文接続の用法について述べた。第4部では、本研究が扱えなかった問題を取り上げ、また、本研究の今後の展望について述べた。

1 主題の省略を可能にする要素及び主題が省略される文接続の用法

第2部では、主題の省略を可能にする要素、及び主題が省略される(1)(2)のよう

な文接続の用法について論じた。

本研究では、主題が省略される文接続を、主題も接続詞も省略される(1)のような文接続と、主題が省略され、接続詞が顕現する(2)のような文接続に分け、前者を「 ϕ 」の文接続、後者を「接続詞 ϕ 」の文接続でそれぞれ略称した。

(1)の2つの文が「 ϕ ϕ 」の文接続で接続可能なのは、2つの事象が依存関係にあるからである。第2文は、「便せんと封筒を買った」という事象が行われる場所を表す「で格成分」が文中に現れておらず、それを第1文「店へ行った」に依存している。依存関係が存在しない文と文は、「 ϕ ϕ 」の文接続で接続することは難しい。

(5) ? 田中にご飯を食べた。 ϕ ϕ テレビを見た。

しかし、「接続詞 ϕ 」の文接続は、依存関係が存在する事象と事象の接続にも((2))、依存関係が存在しない事象と事象の接続((6))にも用いられる。

(6) 田中にご飯を食べた。そして ϕ テレビを見た。

(6)の2つの文は、接続詞「そして」により述語動詞「見る」という事象が行われる時間を第1文に依存している。

このように、後文が述語動詞が必要とする「格成分」的な要素を前文に依存する場合、2つの文は主題が省略される文接続で接続することが可能である。主題が省略される文接続は、いくつかの文を通じて一まとまりの情報を伝える場合に用いられる文接続である。

2 主題の顕現を必要とする要素及び主題が顕現する文接続の用法

第3部では、主題の顕現を必要とする要素、及び主題が顕現される(3)(4)のような文接続の用法について論じた。

本研究では、主題が顕現する文接続を、接続詞を伴うか、伴わないかによって、接続詞が省略され、主題が現れる文接続(3)と、接続詞も主題も現れる文接続(4)に分け、前者を「 ϕ 主題」の文接続、後者を「接続詞主題」の文接続でそれぞれ略称した。

前文の事象が後文の述語動詞が必要とする「格成分」的な働きをする場合((3))、または前文と後文の補語成分が「照応関係」にある場合((7))、2つの文は「 ϕ 主題」の文接続で接続される。(例文(7)における網掛け部分は、「照応関係」にある内容である)。

(7) その原因を、地面に対してのなんらかの力を加えたせいと湯川は推理した。

ϕ たとえばそれは穴を掘ったとかだ、と湯川は言った。(『予知夢』p160)

(7)の第1文の「地面に対してのなんらかの力を加えたせい」は、第2文の「たとえばそれは穴を掘ったとか」によってその内容が具体化される。何らかの依存関係が存在しない文と文は、「 ϕ 主題」の文接続で接続することは難しい。

(8) ? * 田中にご飯を食べた。 ϕ 彼はテレビを見た。

しかし、「接続詞主題」の文接続は、依存関係が存在する文と文((1)、(7))の接続にも、依存関係が存在しない文と文の接続((5))にも用いられる。

(9) 田中にご飯を食べた。そして彼はテレビを見た。

「接続詞主題」の文接続は、さらに(10)のように、2つの出来事の回数が異なる事象と事象も接続にも用いられるが、このような文接続では「接続詞 ϕ 」の文接続は用

いられにくい。つまり、接続詞を伴う場合、主題の有無で「出来事の回数の制約」は異なる。

(10) 田中は今日だけでなく、何回も何回もこういうことに遭った。そして、彼は {?そして ϕ } 経験を踏まえてこう決断した。

第2部と第3部の考察を通じて、(1)(2)(3)(4)の文接続は、文接続の使用条件、文接続の用法が異なることが明らかになった。

本研究では、この4つの文接続の使用条件を表1のようにまとめた。

表1 主題の省略される2つの文接続と主題が顕現する2つの文接続の成立条件

文接続の成立を制約する要素 文接続の形式		結束性の制約	時間関係の制約	出来事の回数の制約	他の文の介在の制約	同一主題の他の事象との接続制約
主題が省略される文接続	「 ϕ ϕ 」の文接続	受ける	受けない	受ける	可能である	他の事象との接続可能性が高い
	「接続詞 ϕ 」の文接続	受けない	受ける場合と受けない場合がある	受ける	不可能である	他の事象との接続可能性が低い
主題が顕現する文接続	「 ϕ 主題」の文接続	受ける	受けない	受ける	可能である	他の事象との接続可能性が高い
	「接続詞主題」の文接続	受けない	受ける場合と受けない場合がある	受けない	不可能である	他の事象との接続可能性が低い

表(1)をみると、接続詞が省略される「 ϕ ϕ 」の文接続と、「 ϕ 主題」の文接続の用法は基本的に同じであるように見えるが、この2つの文接続が受ける結束性の制約の内容は異なる。前者は、前文の事象が後文の述語動詞が必要とする「格成分」的な働きをする文と文の接続に用いられるが、後者はそのような依存関係だけでなく、2つの文の補語成分が「照応関係」にある文と文の接続にも用いられる。つまり、「 ϕ ϕ 」の文接続は2つの文の補語成分が「照応関係」にある(7)のような文と文接続することは難しい。

(11) ?その原因を、地面に対してのなんらかの力を加えたせいと湯川は推理した。 ϕ たとえばそれは穴を掘ったとかだ、と ϕ 言った。

主題が省略される文接続は、前文の行為が後文の述語成分が必要とする「格成分」的な働きをしない文と文の接続には用いにくい。(10)のように、出来事の回数が異なる文と文は、前文の複数の出来事が後文の一回の出来事が必要とする「格成分」的な働きをすることが難しく、主題が省略される文接続で接続されることは難しい。

3 本研究の今後の課題と展望

本研究では、主に「固有名詞+人称代名詞」の形での文接続を対象として主題の省略と

顕現についての考察を行なったが、継起関係にある同一主題の文接続には(7)のような「固有名詞+固有名詞」の形の文接続もある。しかし、このような文接続は、以下の(12)のようにいつでも用いられるということではない。

(12) ? 田中は店へ行った。☐田中は便せんと封筒を買った。

今後、主題がどのような名詞の形で顕現されるかということも視野に入れて研究する必要がある。

第2部、第3部における結束性の視点からの日本語の主題の省略と顕現についての考察が妥当であるならば、これまで「文連鎖レベルでは客観的な内省が困難」(清水(1999))とされてきた現象—文接続レベルでの主題の省略と顕現—を文法として明示的に、操作的な方法で記述することが可能であることが提示され、文接続文法(テキスト文法)に対する1つの貢献になる。

文接続における結束性と、主題の省略、主題の顕現は日本語という個別言語だけでなく、他の言語にも存在する現象である。これは、日本語における結束性と主題の省略、主題の顕現は、他の言語の同様の研究にも応用可能であることを示唆する。日本語より主題(主語)の省略が難しいとされている中国語でも、前の事象が後の事象が行われる場所(12)、原因(13)を表わす働きをする場合、2つ目の事象の主題(主語)は省略される。

(12) 田中去商店☐☐买了信笺和信封。

(日本語訳: 田中は店へ行った。☐☐便せんと封筒を買った。/ 田中は店へ行って便せんと封筒を買った。)

(13) 田中因为感冒了, ☐☐所以没有上学。

(日本語訳文: 田中は風邪を引いた。☐☐学校を休んだ。/ 田中は風邪を引いて学校を休んだ。)

ただし、(12)のような中国語文では、それが複文であるか単文であるかという点では日本語とは異なる。しかし、ここでより重要なのは依存関係が存在する2つの事象が接続されるとき、中国語においても2つ目の事象の主題(主語)は省略されるということである。異なる言語の対照研究から、結束性と主題の省略と顕現の研究が期待される。

審査結果の要旨

1. この論文の意義

この論文は、現代日本語で同じ主題を持ち継起関係にある文が接続するとき、後ろの文で「～は」のような文の主題が現れるか現れないかを、接続詞が現れるか現れないかとも絡めながら分析したものである。主題だけの研究や接続詞だけの研究はこれまでも行われてきたが、両者を関連づけて文の接続方法を本格的に研究したものはまだなく、大きな意義がある。

2. この論文の総合評価

この論文は、研究対象、研究方法、研究結果のいずれにおいても次のように優れており、高く評価できる。

- (1) 研究対象：文の接続にはさまざまなタイプのものがあり、それが主題が現れるかどうかにも関係する。この論文では、同じ主題を持ち継起関係にある文が接続する場合に研究対象を絞ったため、明確な結論が得られたと考えられる。
- (2) 研究方法：文のレベルではなく、文章・談話のレベルで主題が現れるかどうかを考察するために、実例を用いるとともに、実例をもとに主題や接続詞の有無を変えた文が自然かどうかというデータも用いたことが説得力を高めている。
- (3) 研究結果：文の接続が成立するかどうかに関わっている要素として、「結束性」「時間関係」「出来事の回数」「他の文の介在」などがあることを明らかにし、主題が現れるかどうかの対立と接続詞が現れるかどうかの対立による4つのパターンがそれぞれどのような制約を受けているかを解明している。

3. この論文の評価の詳細

3.1 第1部「本研究の理論的枠組み」に対する評価

第1部では、本論文の研究対象や先行研究の問題点が述べられている。研究対象については、主題の省略と顕現を、接続詞の省略と顕現を十分考慮して分析しようとしている点が評価できる。先行研究の問題点についても、的確な指摘がなされている。

3.2 第2部「主題が省略される文接続の成立条件」に対する評価

第2部では、主題も接続詞も省略される文接続と、主題が省略され、接続詞が現れる文接続が扱われている。主題も接続詞も省略される文接続の成立条件としては「結束性」の存在があげられ、「結束性」には「文法的結束性」と「推論的結束性」があることが具体的な用例とともに示されている。一方、主題が省略され、接続詞が現れる文接続は、「文法的結束」がなくても成り立つことが具体的な用例とともに示されている。それぞれの文接続について、成立する場合と成立しない場合の違いを明らかにしており、評価できる。

3.3 第3部「主題が顕現する文接続の成立条件」に対する評価

第3部では、接続詞が省略され、主題が顕現する文接続と、接続詞も主題も顕現する文接続が扱われている。接続詞が省略され、主題が顕現する文接続については、連接される事象をそれぞれの情報として伝達するものだとし、事象を述べる文と文の間に主題の心情を述べる文や、自然の情景を述べる文などを介在させられることが指摘されている。一方、接続詞も主題も顕現する文接続では、事象と事象の依存関係は、接続詞が省略され、主題が顕現する文接続より強いとして、行為の回数が異なる2つの事象をも連接させられることが指摘されている。それぞれの文接続について具体的な用例を用いた詳細な検討が行われており、説得力がある。

3.4 第4部「本研究の残された課題と今後の展望」に対する評価

第4部では、本研究の研究史上の位置づけが行われ、残された課題と今後の展望について述べられている。本研究の位置づけとしては、文文法を越えた文接続文法（テキスト文法）への貢献が「主題」と「結束性」の2つの側面からの確に指摘されている。今後の課題としては、特に日本語と中国語・韓国語との対照研究の重要性が強調されている。

4. 今後の課題

この論文で示された結論はおおむね妥当なものだと考えられる。しかし、主題の顕現と省略は、文レベルの文法現象に比べ、文法性の判断が日本語母語話者にとっても微妙である。そのような研究において説得力を高めるためには、さらに大量の用例調査やアンケート調査などを行っていくことが必要であろう。

論文提出者は中国語、韓国語も堪能であるが、その能力を生かした、日本語と中国語あるいは韓国語との対象研究も期待される。特に韓国語の主題の顕現と省略は日本語と似た面をもつが、違いも見られるはずである。そのような対照研究はまだ未開拓であり、研究の進展が望まれる。

5. この論文の外部評価

この論文の内容の一部は、次の論文として、言語学分野の主要な学会誌に掲載されている。

金美林「文接続における同主題の顕現—継起の文接続における同主題の顕現と他の文接続との関係から—」『K L S』28, pp. 163-173, 関西言語学会, 2008年.

これは、この論文内容が学界からも一定の評価を受けていることを示すものである。

6. 審査委員会の結論

本審査委員会は、全員一致で、申請者に対して博士（言語文化学）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。